

## 人文学部におけるカリキュラムの見直し

人文学部 先 田 進

### 経過

人文学部では、大学設置規準の大綱化に伴い、平成5年度に従前のカリキュラムの抜本的な改訂を、さらに一年後の平成6年度には、教養部の廃止・転換及び人文学部改組に伴うカリキュラム改訂をそれぞれ行ない、本年3月、平成6年度入学生の268人を卒業させるに及んだ。この間、二種類のカリキュラムの運用を通じて指摘された問題点の改善をはかるべく、学部内で履修コース委員会や学務委員会を中心に議論を重ね、平成10年度以降入学者に適用する新カリキュラムを作成するにいたった。以下その概要を示す。

### 新カリキュラムの基本的特色

(1) 演習科目の充実——人文学部では、講義系科目もさることながら、より教育効果の高い演習科目を教養・専門のいずれにおいても重視してきた。とりわけ第1年次学生を対象とする「人文教養演習」は、20人以下の少人数で構成され、人文科学の諸分野の差異にかかわらず将来必要とされる自主的な研究姿勢、方法等の育成を目的とした科目であるが、この度のカリキュラムの見直しに際して、コマ数を大幅に増設した。従来のように教師の一方的な講義の中に《正解》を求めめるのではなく、演習参加者が主体的に疑問と取り組み、相互に応酬し合うという姿勢それ自体が大切なのだという考え方に基づく。議論を繰り返す過程で、自分の思い込みや先入観が少しずつ融解し、崩され、代わりにあらたな未知の自己が形成されていく、こうした持続的な問い掛けのプロセスこそが思索の深化や人間の成長を約束してくれるはずだ。

(2) 外国語教育の充実——人文学部では、すでに平成5年度から初修外国語の一部については、短期集中コースを導入していたが、平成10年度からは教養科目のドイツ語・フランス語・ロシア語・中国語・朝鮮語については、すべてを短期集中コースで開設するように改めた。文献の読解力は言うに及ばず、いわゆる《使え

る》外国語の実力を効果的に修得させるための措置である。さらに、人文学部の全課程に実習系科目として、コミュニケーション科目を大幅に増設し、国際化しつつある実社会のニーズに応えうる外国語運用能力の向上をはかった。

(3) 専門共通科目の新設——人文学部では、いわゆる教養教育が専門教育の基礎的、補完的性格を持つとは考えていない。狭義の専門教育は、言うまでもなく、絶えず専門領域の細分化・差異化の方向に進んだり、閉鎖的な制度を生み出したりする危険、つまり一種の自専門中心主義の危険を内在させている。結果として、自専門の深化はおろか、逆にその瘦身化を招くことにもなりかねない。人文学部では、実効ある教養教育を尊重する観点から、第3・4年次学生に対して専門共通科目を新設した。学生がそれぞれの専門分野の初等的知識を修得した後にこそ、はじめて異分野との関連や接点への理解、相互に通底する問題への関心も生まれ、ひいては各専門分野の深化・統合が可能になると判断したからである。すでに平成5年、6年のカリキュラム改訂時に開設した、やはり第3・4年次学生向けの「教養II種」科目と相俟って、この専門共通科目の履修により、学生には、断片的な専門知識の習得に終らず、より柔軟で鋭い智慧を磨いてくれるよう期待している。

### その他

卒業要件や履修方法等においても、以下のように若干の改訂を行なった。

- ① 卒業要件単位数について、132単位から124単位に減らした。学生の予習・復習に充てる時間を確保するためである。
- ② 学生は、これまで各専門分野の演習（ゼミ）に所属していたが、今後は、より広範な履修コースに所属することとした。
- ③ 学生が専門科目を選択するに際し、自らの専門分野の科目のみならず異分野の専門科目を履修しても、その修得単位の多くを卒業要件単位として認定する方向で履修細則を改めた。
- ④ これまで各年次の学生に対して進級判定を行ってきたが、第3年次進級時にのみ行なうことと改めた。